

赤十字NEWS

June 2011 Vol.853
http://www.jrc.or.jp

6



編集・発行／日本赤十字社 企画広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 TEL:03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は、社費に含まれています。

つながることが明日を変える わたしたちは信じています

東日本大震災では「被災者のために何かしたい」という声がかつてないほど広がっています。そうした一人ひとりの思いをつなぐ懸け橋としての役割を担っているのが日本赤十字社です。この日赤の活動や理念を正しく知ってもらうためのキャンペーン「AKB48と一緒に『もっとよく知る 赤十字!』」がスタートしました。世代を超えて日赤への理解と共感を広げていくことが期待されています。

一方、5月中旬には世界の赤十字社代表が訪日。被災地訪問や支援活動の意志統一を行いました。世界の市民もまた、国境を超えて被災者につながっています。

記者発表会に出席したAKB48のメンバー（左から岩岸みなみ、板野友美、高橋みなみ、高城亜樹、渡辺麻友）の皆さん

CONTENTS

2	TOPICS	3	TOPICS	4 5	SPECIAL	6 7	AREA NEWS	8	WORLD
広報特使 藤原紀香さんが被災地でボランティア 第43回フローレンス・ナイチンゲール記章 日本から2名受章		AKB48と一緒に「もっとよく知る 赤十字!」キャンペーンスタート 理事会審議報告・常任理事会開催報告・第77回代議員会開催公告		東日本大震災 世界の赤十字社・赤新月社が被災地へ「東日本大震災・支援国赤十字社会議」開催		宮城・福島・岩手・埼玉・徳島 山形・東京・長野・鳥取・和歌山 スポーツとコラボ Voice & プレゼント		世界が復興へ歩んでいる 中国大地震から3年 ミャンマー巨大サイクロン被害から3年 チェルノブイリ原発事故から25年	

クローズアップひと



岩手県遠野市でボランティアを激励

格闘家
武蔵さん

赤十字の活動は自分の誇り

「赤十字の皆さんと一緒に活動できることを誇りに思います」

5月5～6日、赤十字広報特使の藤原紀香さんとともに、岩手県を訪れて東日本大震災で被災した方々を励ました。4月末にも陸前高田市で友人らと炊き出しを行い、今回が2度目の訪問です。

「被災した町を見て、初めは言葉を失ってしまいましたが、被災された皆さんの頑張っている姿に勇気をもらいました。微力ながら

自分にも何かお手伝いができればと思って、またやって来ました」

武蔵さんは、赤十字社連盟（現在の国際赤十字・赤新月社連盟）の創設に尽力した蜷川新博士のひ孫にあたります。「だから赤十字の活動を見ると、嬉しくなるんです」。

阪神・淡路大震災を大阪で経験。「神戸はもうだめではないかと思いましたが、立派に立ち直りました。だから、東北も必ず復興します。そのための手伝いを続けていきたい」

PROFILE

格闘家として1995年のデビュー以来15年にわたって、K-1リング上で世界中の強豪選手と戦い、昨年現役を引退。国内最高峰の大会であるK-1 JAPAN GPで4度優勝するなど、日本人最強選手として知られ、通称は「世界と戦うサムライ」。「蜷川新のひ孫であることは自分の誇り」と語る。1972年生まれ、大阪府堺市出身。

赤十字
広報特使藤原紀香さんが
被災地でボランティア

「何かお手伝いさせていただくことはないか、自分にできることがあれば一歩ずつやっていきたい」と思いながら来ました」

赤十字広報特使の藤原紀香さんが東日本大震災で被災した岩手県各地を5月5日から訪問。避難所でボランティア活動を行いました。紀香さんの被災地訪問は4月中旬の宮城県に続いて2回目です。



©Ichigo Sugawara

ホットタオルで
心も温か

遠野健康福祉の里(岩手県)では健康生活支援ボランティアの指導のもと、少量のお湯を使ったホットタオルの作り方や、スキんシップによるリラクゼーションなど、簡単にできる災害時高齢者生活支援講習を受講しました。

同市から50キロほど離れた海沿いの町、陸前高田市は今回の大震災で甚大な被害を受けました。

高台にある特別養護老人ホーム「高寿園」には約100人の施設利用者のほか、被災した方々から約200人が避難。日赤の介護施設職員で構成する介護チームが支援活動中です。

ここを訪れた紀香さんは高齢者の方々にやさしく語りかけながら、ホットタオルを作って首筋に当てたり、足湯を提供したりして、心と体をリラクゼーションする活動に取り組まれました。「あったかいね」「ホッとするよ」。どの顔もニコニコです。「講習を受けて作ったホットタオルなどが皆さんに喜んでもらえて、本当によかった」(紀香さん)。

まだ続く
不安な日々

JR釜石駅近くの鈴子広場

は、日赤救護班やこころのケア班の活動拠点。3つの救護班が分担して仮設診療所での診察や巡回診療を行っています。

紀香さんは救護班のメンバーを激励し、診察に訪れた方々と話をしました。乳児を連れた若いお母さんは「まだまだ不安な日々が続いています。でも紀香さんに話を聞いてもらって、とても嬉しかったです。本当にありがとうございます」と声を震わせました。

武蔵野赤十字病院の原信博医師は「被災された皆さんは非常に疲れています。そこに紀香さんのような方が来てくれることは、被災された方々にとって非常に嬉しいことで、力にもなります」と話します。

被災後誕生した
子のために

旧釜石第一中学校体育館で避難生活を送る被災者は現在約120人。被災直後はおよそ600人が避難したといひます。

「寒かったですよ」「お加減はいかがですか」「まだ夜は寒いで風邪を引かないでください」と声をかけながら、避難している方々の話を聞きます。

震災約1ヵ月後の4月13日に誕生したという赤ちゃんを連れたお母さんとおばあちゃんに出会いました。赤ちゃんの名は「桃太郎」くん。

「あなたは本当に頑張りました。大きくなったらお母さんを支えてあげてね」と紀香さんが赤ちゃんに語りかけると、おばあちゃんは「家

ずっと応援を
続けたい

「被災された皆さんに少しでも笑顔になっていただくことができて、嬉しかったです。私も阪神・淡路大震災を経験しました。復興のためには日本全国、そして世界中の人たちのサポートが必要です。状況が1日1日よくなるよう、これからもずっと応援していきたい」と紀香さん。

被災地訪問には、友人であるミュージシャンの大黒摩季さんと格闘家の武蔵さんが同行。各避難所では裁縫セット(タレントのキャシー中島さん提供)、陸前高田市立第一中学校では野球グローブ(横浜ベイスターズの三浦大輔投手提供)などをそれぞれプレゼントしました。

これまでの広報特使の活動は日赤ホームページ内 http://www.jrc.or.jp/12/13/vcms3_00002175.htmで紹介しています。

災害時に 少量のお湯でリラックスできる
役立つ ホットタオル

用意するもの

タオル2枚
お湯
紙コップ
ビニール袋(レジ袋で可)

作り方

- ①タオル1枚をビニール袋に入れます。
- ②紙コップ半分ほどのお湯をタオルにかけます。
- ③ビニール袋を乾いたタオルで包み、軽く揉みます。
- ④ビニール袋からタオルを取り出し、首などに当てます。タオルはかなり熱くなるので要注意です。



①ビニール袋にタオルを入れ、熱湯をかける



②乾いたタオルに包んで軽く押さえる

「赤十字災害時高齢者生活支援講習ハンドブック」より

第43回フローレンス・ナイチンゲール記章

日本から看護師2名が受章

顕著な功績を果たした看護師に贈られる「フローレンス・ナイチンゲール記章」の今年の受章者に、日本在宅看護システム代表の村松静子さん、高知県立大学学長・高知短期大学学長の南裕子さんが選ばれました。5月12日に赤十字国際委員会(ICRC)ナイチンゲール記章選考委員会が発表したもの。

同記章は、平時または戦時に傷病者や障害者などへ

勇気を持った看護活動を行った、公衆衛生と看護教育の分野に大きな貢献があった看護師を対象に、2年に1度贈られています。今年は16カ国39人が受章しました。

村松 静子さん



ボランティアによる訪問看護実践を経て、在宅看護研究センターを設立し、在宅看護の基盤作りに貢献。看護教育にも力を注ぎ「在宅看護論」を誕生させた。

南 裕子さん



看護ボランティアの派遣体制整備に尽力。日本災害看護学会、世界災害看護学会の発足にも貢献した。日本看護協会会長、国際看護師協会会長を歴任。

「私たちと一緒に行動を」

AKB48 高橋みなみさん



今回の震災で、私たちは当たり前前にできていたことの尊いふかふかのベッドで眠られさを知りました。おいしいご飯を食べられること、好きな服を着られること、あたたか

いふかふかのベッドで眠られている人がたくさんいます。赤十字の使命は世界中で苦しんでいる人を公平に救うことです。一人ひとりが力を合わせれば、必ず救えるのちがあります。

いま、自分に何ができるかを考え、私たちと一緒に行動してみませんか。まずは知ること。ウェブで私たちと一緒に赤十字について学んでいただけたらうれしいです。



特設ウェブサイト「AKB48と一緒に『もっとよく知る 赤十字!』」
http://www.jrc-kentei2011.jp/

近衛忠輝社長は「赤十字の活動や成り立ちを

知ってもらい、今回のような緊急時以外にも応援していただくのが望ましいことです。AKB48の若い皆さんのお力を拝借して赤十字についてもっとよく知っていただければ」とあいさつしました。

AEDを体験

日本赤十字社のオフィシャルメッセンジャーに就いたAKB48の5人が記者発表会に先立ち、本社の災害対策本部を見学。近衛社長から被災地の状況や日赤救護班の活動などについて説明を受けました。

次いで心臓マッサージの方法やAED(自動体外式除細動器)の使い方などを体験しました。

「AEDの存在は知っていましたが、使うのは初めて。でも、初めての人にもわかりやすいです。ちょっとした知識があれば(もしもの時に)だれでも簡単にできますね」(峯岸さん)

楽しく学べる「赤十字検定」

おうと今回のキャンペーンは企画されました。

東日本大震災の発災以来、日赤にはボランティアや義援金についての問い合わせが急増しています。問い合わせの中には、活動内容が正しく理解されていないために寄せられる質問も多かったことから、これまで以上に赤十字の活動をもっとよく知ってもらう

金プロジェクトを立ち上げ、3月にファンから寄せられた募金などと合わせて6億円を日赤に送金。チャリティーイ



ベントでの募金は5月16日も寄せられています。今後ともコンサートなどで義援金募金や日赤への寄付を呼びかける予定です。

メディアも大注目!

日赤本社で17日に開かれた記者発表会には高橋みなみさん、板野友美さん、高城亜樹さん、峯岸みなみさん、渡辺麻友さんの5人が救護服姿で登場。テレビ・新聞など54社102人が取材に駆けつけました。



心臓マッサージに挑戦する渡辺さん

理事会審議報告

平成23年4月22日、理事会に文書による付議が行われました。

審議結果は左記のとおりです。

記

付議事項

1 東日本大震災にかかる海外救援金を財源とする平成23年度一般会計歳入歳出予算の補正手続きについて
今回の審議は、去る3月11日に発生した東日本大震災に対する海外救援金を速やかに被災者救援事業に充当すべく、早急に審議を行う必要があったため、文書をもって理事会に諮られました。理事会の構成役員(社長、副社長及び理事)現員62人のうち、57人から回答が寄せられ、57人全員が賛成しましたので、平成23年5月13日付で原案のとおり議決されました。

常任理事会開催報告

平成23年5月20日、本社において平成23年度第2回の常任理事会が開催されました。

付議事項

1 予算の補正について(東日本大震災海外救援金にかかる一般会計歳入歳出予算の補正)
2 規則の改正について(日本赤十字社災害義援金取扱規程の一部改正)
3 理事会に付議する事項について
(日本赤十字社社会福祉施設規則等及び社会福祉施設特別会計規則の一部改正)
審議の結果、予算の補正及び規則の改正については原案のとおり議決され、理事会に付議する事項については、原案のとおり理事会に付議することについて了承されました。

また、海外救援金を財源とする東日本大震災復興支援計画、東日本大震災国内義援金の受付及び送金状況などについて報告しました。

第77回代議員会開催公告

平成23年6月17日(金)、午後1時から新霞が関ビル「全社協・灘尾ホール」(東京都千代田区霞が関3丁目3番2号)において第77回代議員会を開催し、左記の事項を付議いたします。

平成23年6月1日

記

第1号議案 役員の選出について

日本赤十字社

こころを重ねて 復興への希望をいま

救援金には一人ひとりの
気持ちが込められています

アメリカ赤十字社アジア・中東課長
マーク・プレスランさん

アメリカもハリケーンや大竜巻などに度々襲われる災害多発国です。ですから、速く離れた日本で発生した地震にも関わらず、国民が高い関心を示したのだと思います。企業や組織だけでなく、多くの個人が行動を起こしました。ある中学生の女の子はバイオリンをワシントン DC の地下鉄駅で演奏し、募金を集めました。救援金には、こうした一人ひとりの思いが込められています。私たち全員が、被災者を切に心配していることを伝えたいと思います。

今回の震災で日本赤十字社が優れた対応を示すことができたのは、過去の災害救護から学んだ経験を生かしたからだと思います。私たちも、今回の日赤の経験をこれからの災害対策、救護に生かさないけません。



自分の問題として
フィンランド国民は考えました

フィンランド赤十字社事務総長
クリスティーナ・クンプラさん

地震への備えを行い、科学技術も進んでいる日本がこれほどの被害を受けたことは大変な驚きでした。同じ先進国の一員として、多くのフィンランド国民は、今回の震災を自分の問題として受けとめざるを得ませんでした。それだけに被災者に対しては、心のこもった善意が数多く寄せられました。高齢者施設で暮らす 90 代の女性が「今年は自分の誕生プレゼントはいらない。その分を寄付して」と訴えるなど、感動的なエピソードもありました。

日本赤十字社とボランティアの皆さんの救護活動や被災者支援を、赤十字に携わる一員として私は誇りに思っています。こうした活動に支えられて、被災者の方々の生活再建が一日も早く実現することを願っています。



感動的な日赤の救護活動の
経験を世界で共有したい

中国紅十字会対外連絡部長
ザン・ミンさん

2008 年に四川省などを襲った中国大地震では、日本から大きな支援をいただきました。その復興支援が続く中での東日本大震災です。多くの中国国民が心を痛め、「今度は私たちが支援しよう」と募金活動に取り組みました。中国紅十字会には募金とともに「被災者の皆さん頑張れ」「一日も早い復興を」などの声が寄せられています。

今回、日本は地震と津波に加えて原発事故という経験したことのない事態に見舞われました。非常に困難な状況下で日赤が救護活動を展開していることに、私たちは深い感動を感じています。こうした日赤の活動は、今後に生かさなければなりません。そのためにも、今回の日赤の経験と教訓を私たち全体が共有する必要があると考えています。



困難に耐える被災者の姿に
人間の強さを感じています

スイス赤十字社国際部長
マーティン・ファラーさん

今回の震災ではスイス赤十字社が国民に寄付を呼びかける前に、救援金が続々と寄せられ始めました。過去の災害ではなかった特徴です。

地震と津波に加えて、原発事故が深刻な被害をもたらしたことで、「(スイスにも原発があり)人ごとではない」という不安を国民は感じています。それが寄付の広がりにつながったといえます。

マスコミ報道では、避難所の生活も報じられています。それを見た方から「私の寄付を、避難所生活の負担が大きい高齢者の支援に使って」という申し出もありました。がれきに埋もれた町の中で、不便な生活に耐える被災者の姿に、私は人間の強さ、素晴らしさを感じています。一日も早い復興へ私たちは協力を惜しみません。



世界の赤十字社・赤新月社が被災地へ

日本国内だけでなく、世界に大きな衝撃を与えた東日本大震災。海外の赤十字社には、各国の市民から多くの救援金が寄せられ、日本赤十字社はそれらを活用した被災者支援を進めています。その支援内容の確認と被災地視察を行う「東日本大震災・支援国赤十字社会議」が5月9日から11日まで日本で開催されました。

原発事故への備えを

今後世界で起こりうる大規模災害への対応も、会議では議論に。地震と津波により深刻な原発事故が引き起こされた問題からみ、参加者からは、福島での救護活動や将来の原発事故への対応についても質問が出されました。

日赤の近衛忠輝社長は「世界の約30カ国に400基以上の原発がある。今回の事故を踏まえて徹底的な対策が必要」と訴えるとともに、赤十字としても原発事故問題を国際会議の場で議論することが必要だとの問題提起を行いました。



誤った情報による風評被害への懸念も表明



海外救援金を活用した主な救援復興事業計画

分野	事業	予算
医療インフラの 応急復興支援	●石巻赤十字病院を含む石巻市周辺の医療インフラが、本格復興するまでの間の応急復興支援	約50億円
被災者の生活 再建支援	●避難所の環境整備事業(給水設備の設置、空気清浄器などの整備など) ●応急仮設住宅への生活家電セット寄贈事業(建設が進められている仮設住宅7万~8万世帯) ●福祉車両寄贈事業(要介護高齢者、障がい者等に対するサービスなどへのアクセス手段の提供) ●介護用ベッド整備事業(特別養護老人ホーム、介護老人保健施設など)	約225億円
その他	●救援物資の購入・補充(毛布、緊急セット、パーテーション等の購入補充、保管倉庫の設置など) ●医療救護班活動の充実(仮設診療所設備の更新など)	約25億円

※——下線部分は既に事業に着手し、被災地に届き始めています。

「変化」に対応したグローバルネットワークの強化を

国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC) ベケレ・ゲレタ事務総長

——IFRC として今回の震災をどうとらえていますか？

地震と津波に加え、原発事故が発生したことで、新しい災害状況が生まれました。これが、震災対策の進んでいた日本で起きた点に注目しています。世界が衝撃を受け、「災害への備えを強化すべきだ」という喚起を人々に与えました。

——こうした事態への日赤の対応をどう評価しますか？

早期の救護活動やその後の被災者支援など大変に素晴らしいものでした。世界の赤十字の手本といえます。日赤からの支援要請を受けなかったにもかかわらず、各国赤十字社が自主的に救援金募集に取り組み、多くの救援金を寄せた点についても、世界の赤十字の連帯する姿を示せたと評価しています。

——今後への課題はありませんでしたか？

今回、海外の個人や企業から日赤へ直接、救援金が寄せられるケースが目立ちました。従来の国際的な救援金送付の仕組みでは、自国の赤十字社へ寄付を行い、それがIFRCを通じて被災国赤十字社へ渡されました。しかしオンライン募金などネットの発達で、

世界の人々と被災国赤十字社が直接つながれる環境が生まれているのです。そうした「変化」が今回の震災で浮き彫りになりました。そこに対応した新しいルール作りは課題の一つといえるでしょう。

——赤十字の国際的ネットワークの生かし方という点も会議では議論になりました

国際赤十字は世界レベルでの災害対応システムを持っています。しかし、各国赤十字社の災害対応能力、政府との関係で与えられた各社の役割分担には、国ごとに大きな違いがあります。それを踏まえた上で、グローバルネットワークを維持・強化する必要があるのです。例えば、北アフリカのチュニジア赤新月社は、海外からのあらゆる支援を調整する役割を政府から与えられています。IFRC にはそうした活動をサポートする準備がありません。このようなケースをも想定し、赤十字の災害対応システムを効果的に機能させる努力が求められていると考えています。





患者さんや薬剤師の笑い声が避難所を明るく照らします

東日本大震災
笑顔を保つ移動薬局メロンパンチーム巡回中！



宮城 2011.4.26

慢性疾患を抱える被災者へ処方薬を届ける移動薬局「メロンパンチーム」が宮城県石巻市で活動中です。チームは、石巻赤十字病院で調剤された薬を避難所へ届けるのが任務。道路事情に詳しい病院職員と3、4人の薬剤師で構成され、薬の配達や服薬指導、「おくすり手帳」の作成などを行っています。

チームは発災10日後に結成。移動式パン屋のように人々に喜びを届けようという思いから「メロンパンチーム」と名付けられました。全国の赤十字病院から派遣された薬剤師が参加し、毎日2チームが巡回を続けています。患者さん一人ひとりへの声かけを通じて、笑顔と元気を運ぶのもチームの役割です。

4月26日、石巻赤十字病院の岩瀬薬剤師のチームは6カ所の避難所を訪問しました。薬を受け取った国分あや子さんは「薬剤師さんとお話できることでストレス発散になります」と笑顔。櫻井君雄さんは「おくすり手帳を被災後初めて作ってもらえて良かった」とほっとした表情を見せました。

岩淵薬剤師は「薬剤師として、医療人として、そして人間として何ができるのか。こういう場所でなければ経験できないことの中から多くのことを学んでいます」とやりがいを語っています。

**東日本大震災
笑いで震災乗り越えよう
チャリティ寄席開催**



福島 2011.4.30

みそ家笑遊こと川^{かわ}越^ご俊^{しゅん}哲^{てつ}さんら福島素人落語の会のメンバーが4月30日、日赤福島県支部と協力し、震災支援イベントとしてチャリティー寄席を開催しました。

福島素人落語の会では、5月に落語会を予定していましたが、震災の影響で中止に。そうした中、「少しでも笑顔を届けたい」と福島県支部に企画を持ち込み、今回のチャリティー寄席を実現させたものです。会場となった福島市内の御倉邸には入りきらないほどの方が来場。中入りでは、救護服を着た赤十字のスタッフが高座に上がり、震災での救援活動などを紹介しました。



「落語がしたくてしくて、うずうずしていました」とみそ家笑遊さん

巨人軍「赤十字応援デー」 坂本選手リーダーに訴え

東京 2011.5.25

東京ドームで5月25日に開催された巨人対ホークス戦は「赤十字応援デー」。訪れたファンに向けた赤十字活動のPRが繰り広げられました。

読売巨人軍の「赤十字支援プロジェクト」は2008年スタート。4年目となる今年は、東日本大震災の被災者支援がテーマです。被災地のパネル写真展示や職員による救護活動報告のほか、ゲート前では文京区赤十字奉仕団員らが「赤十字応援ステッカー」を配付したり、寄付を募りました。試合前には赤十字支援リーダーの坂本勇人選手（写真左）が「チャリティートートバッグ」をファンに販売し、赤十字支援を呼びかけました。



学校は39人の新入生を迎え、6月1日から石巻専修大学の校舎で授業再開

東日本大震災 「赤十字理念」支えに学生が避難所で看護活動



宮城 2011.3.11

石巻赤十字看護専門学校（宮城県石巻市、飯沼一宇学校長）の教員と学生が震災直後、避難先小学校で看護活動に奮闘。工藤三枝子副学校長は「物がないうちで工夫を凝らしたり、相手を理解することの大切さを学んだ学生たちは、人道・公平という赤十字の原則を実践できる看護師に育ってくれると思います」とその活動を振り返っています。

同看護専門学校が震災に襲われたのは、1、2年生79人が授業を受けている最中のこと。学生は教員の指示で学校から100メートルほど離れた湊小学校に避難し全員無事でしたが、津波は看護学校だけでなく避難先の湊小学校にも押し寄せ、1階部分が水没する被害を受けました。

小学校には付近の住民も避難していました。教員たちは溺れて運ばれた被災者の体を温めたり、動けない方のトイレのお世話をしたりと不眠不休の看護活動。学生たちも看護の手伝いに避難所内を駆け回りました。食料や水が不足する状況下での活動は3日間続き、教員と学生が小学校を出られたのは14日の夕方。工藤副学校長は「赤十字看護師として、また赤十字看護師を目指す者としての使命感が活動を支えたと思います」と全員の奮闘を讃えています。

東日本大震災 スマトラの 恩返しを被災地で



岩手 2011.4.24



「被災者には、こころのケアが大切です」とスワルティさんは語ります

「支援してくれた日本に恩返しを」——2004年のスマトラ島沖地震・津波災害での救護活動経験を持つ姫路赤十字病院のスワルティ看護師（ジャワ島出身）が4月24日から28日、救護班員として岩手県山田町での活動に参加。看護の合間に故郷インドネシアの歌を披露するなど、被災者を励ました。

スワルティ看護師は、日本とインドネシアとの経済連携協定（EPA）に基づく外国人看護師候補者の受け入れ事業で3年前に来日。今年3月、日本の看護師国家試験に合格しました。被災者からは「彼女の頑張りを目の当たりにして、私たちも頑張る気持ちが湧いた」という声が聞かれました。

赤ヘルファンの球場 献血PRで赤十字一色に

広島 2011.4.17

広島東洋カープと広島ライオンズクラブの協力を得た献血への呼びかけが4月17日、プロ野球セリーグ広島対巨人戦の行われたマツダスタジアム広島で実施されました。球場周辺では、広島ライオンズクラブの会員らが、続々と詰めかけるカープファンに献血への協力を声かけ。カープの石原慶幸選手会長はスタジアム内の大型ビジョンで「献血に協力しよう！」と訴えました。

この日は、試合開始までに献血会場に108人の方が足を運び、うち70人が献血。また、広島県支部による赤十字事業の紹介コーナーも企画され、東日本大震災の写真などに多くの人が足を止めていました。



「けんけつちゃん」と救護服の新入職員が応援ダンス

赤十字運動月間 もっと身近に赤十字 イベント開催しPR！



長野 鳥取 和歌山 2011.5.3～8

毎年5月は「赤十字運動月間」。赤十字の活動や理念をより多くの市民に広げていくためのイベントに今年も各地で取り組みました。

長野県支部は5月7日、「赤十字フェスタ in 長野」をJR長野駅前で開催しました。東日本大震災と長野県北部地震での医療救護活動を紹介したパネル写真や被災地に送った救援物資を展示し、災害時に赤十字が果たす役割をPR。来場者からは「被災地での活動を知ることができて有意義でした」などの声が寄せられました。

世界赤十字デーの5月8日に「赤十字ふれあい広場」を開催したのは鳥取県支部です。会場となった日吉津村のショッピングセンターを訪れた買い物客らに、東日本大震災での救援活動紹介や赤十字クイズ、「救急法体験コーナー」などを通して赤十字への理解と協力を呼びかけました。

和歌山支部が5月3日に和歌山市内で開催した「第4回赤十字ふれあい広場」では、支部職員に加え地元ボランティア50人が募金活動などに奮闘。このイベントにあわせて赤十字奉仕団員約2500人も、県内各所で街頭募金や清掃活動などに取り組みました。



鳥取県の「広場」に設けられた応援ボードには、被災地へのたくさんのメッセージが

東日本大震災 被災地で泳ぐ鯉のぼり 深谷から応援 メッセージ



埼玉 2011.4.29



川口小学校元校長の桑原昭さんは「今度は私たちが勇気づける番です」

深谷市赤十字奉仕団は、震災で大きな被害を受けた岩手県田野畑村へ大小227匹の鯉のぼりを贈呈。4月下旬から5月上旬にかけて同村立田野畑小学校に掲げられ、被災地の子どもたちを励ました。

鯉のぼり贈呈は、深谷市に合併された旧川本町と田野畑村とが友好都市の関係だったことから実現。同赤十字奉仕団は、深谷市PTA連合会や7年前の中越地震で被害を受けた新潟県長岡市立川口小学校の協力も得て、市内外から鯉のぼりを収集しました。田野畑小学校5年生の佐々木陽香さんは「今年は鯉のぼりを見られるとは思っていなかったのうれしいです」と笑顔を見せました。

東日本大震災 徳島・山形県支部が 共同で炊き出し



宮城 2011.5.12～13



被災された方々に喜ばれた阿波尾鶏の唐揚げとわかめしらすご飯

「こんなに、んめもの、久しぶりに食べたさ～」。徳島県支部と山形県支部の地域奉仕団員ら26人が5月12、13日、宮城県仙沼市の小原木中学校避難所で合計1800食（450食×4回）の炊き出しを共同で行いました。

徳島県支部は被災された方々に元気になってほしいと徳島県産の食材を使った炊き出しを計画。被災地を継続的に支援していた山形県支部に相談したところ、共同で実施することになりました。2日間のメニューは阿波牛の牛丼、阿波尾鶏の唐揚げ、ネギトロ丼など。温かい食事や生鮮食品をほとんど食べられなかった避難所の方々からは、満面の笑顔と拍手が沸き上がりました。 **HPへ**

※ **HPへ** の表示があるものは日赤ホームページ(www.jrc.or.jp)で詳細をご覧ください

Voice&プレゼント

元気もらった スワルティさんの笑顔

辻本英子（奈良県桜井市）

看護師試験に合格したインドネシア人のスワルティさんが被災地の救護班活動に参加するとの記事を読みました。テレビのニュースでも取り上げられていましたね。被災された人の話にあいづちをうち、皆さんを励ましていたスワルティさんの笑顔と優しさを見て、私も元気をいただきました。

熱を入りたいボランティア活動

三輪夕奈（群馬県富岡市）

私は学校でJRC（青少年赤十字）部に所属していて部長を務めています。この間は、学校で東日本大震災のための義援金を集め、寄付しました。赤十字新聞を読んで、今は特にボランティアが大切な時なのでより一層赤十字活動に熱を入れていきたいと思いました。

プレゼント応募方法

「赤十字新聞」や赤十字活動へのご意見や感想などを下記までお寄せください。毎月抽選で素敵な赤十字グッズをプレゼントします。

★今月号のプレゼント

AKB48メンバーのサイン色紙を2名様に

●郵送／〒105-8521

東京都港区芝大門1-1-3

日本赤十字社企画広報室

赤十字新聞6月号プレゼント係

●FAX／03-3432-5507

●メール／koho@jrc.or.jp

（件名／赤十字新聞6月号プレゼント応募）

●応募締切／6月27日（月）必着

●お名前、ご住所、電話番号、希望プレゼント名と

赤十字新聞の感想をご記入のうえ、ご応募ください。

匿名希望の際はその旨もご記入ください。

当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。



原発の風評被害を 防ごう マスコミ関係者に訴え



福島 2011.4.29



黒い雨に濡れたトマトを、洗って食べた記憶が沖田医師にはあるといいます

原発事故による風評被害の拡大を防ぐための「放射線の基礎知識セミナー」が4月29日、福島県内で開催されました。緊急被曝アドバイザーとして福島県に派遣された広島県赤十字血液センター所長の沖田肇医師らがマスコミ関係者を対象に開いたもので、8社から16人が参加しました。

広島に原子爆弾が投下された時、3歳だったという沖田医師は「広島の人たちを苦しめたのは差別や偏見。偏見は正しい情報がないところから生まれ、人の心を傷つけます」と熱弁。「危険区域以外の微量な放射線に対する過剰な反応は必要はありません」と強調し、冷静な報道を呼びかけました。 **HPへ**

「救援のために水を運ぶ婦人の像」日赤看護大学で除幕式



東京 2011.5.11



「末永く愛される像になってほしい」（彫刻家の岩田さん）

日本赤十字看護大学広尾キャンパス（東京・渋谷区）の前庭で5月17日、彫刻家の岩田実さんが制作したブロンズ像「救援のために水を運ぶ婦人の像」（高さ約1.6メートル）の除幕式が行われました。像は「ソルフェリーノの戦い」（1859年）で倒れた傷病兵に敵味方の区別なく水を届け、赤十字創設のきっかけとなった農村の女性たちをイメージして作られたもの。2007年に日赤本社へ寄贈された1体目に続くモニュメントです。

建立プロジェクト実行委員会の宮本悠美子さんは「看護師になる学生たちが学ぶキャンパスに像を建てることができ嬉しい」と喜びを語りました。



世界が復興へ歩んでいる

中国大地震から3年 赤十字が支える街の復興 「今度は私たちが支援」と日本へのエールも

死者・行方不明者8万7000人以上という大被害をもたらした2008年5月の中国大地震から3年。日本赤十字社をはじめとする世界の支援などにより被災地は着実に復興への道を歩んでいます。

学校、病院などの完成相次ぐ

中国大地震では、人々の生活基盤である住宅はもとより、学校や医療施設など多くのインフラが破壊されました。こうした事態に、国際赤十字・赤新月社連盟

(IFRC) や各国赤十字社などは、中国紅十字会とともに住宅や学校、病院・クリニックの再建などの支援を続けてきました。

国民から寄せられた約51億円の救援金を基に日赤も復興事業を展開。学校30校のほか、39の病院や56のクリニック

の再建を支援し、現在までに学校の7割、病院の9割が完成しました。

日赤の支援は、辺境地区や少数民族地区も多く含まれます。そのために工事が遅れた案件もありましたが、5月10日には再建校最大の喬庄中学校（四川省）も完成。すべての支援事業の今年度中の終了を目指して、工事が進められています。

「強い気持ちで困難に打ち勝って」

3月11日に発生した東日本大震災は、中国大地震の被災者にも深い悲しみを与え、日本の被災者支援に向けた活動が各地で取り組まれています。

日本の再建支援を受けた学校や病院では児童や教員、職員が募金活動を実施。集まった救援金は四川省内だけで100万元（約1300万円）に達しました。

4月26日に竣工式が行われた四川省の碾盤小学校の児童たちは「私たちのここは日本の被災者の皆さんとつなが



ています」という横断幕を掲げました。同校5年生の秦君さんは「日本の友達が苦しんでいるのは本当に悲しい。でも強い気持ちで困難に打ち勝ってほしい。私たちも乗り越えました。日本の友達のためにできることは何でもしたい」と語ってくれました。



完成した校舎の前で日本の被災者にエールを送る碾盤小学校の児童たち

ミャンマー巨大サイクロン発災から3年 被災者の日常に戻った笑顔 復興支援事業が7月完了

死者8万4500人、行方不明者5万3800人、被災者240万人以上——2008年5月、ミャンマーに同国史上最悪の被害をもたらしたサイクロン・ナルギス。国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)の3年にわたる復興支援事業が、今年7月の終了に向け総仕上げの時期を迎えています。日本赤十字社の支援した学校再建も全60校が完成しました。



再建された個人用住宅と喜ぶ家族

IFRCは13県・地区の10万人の被災者を対象に住宅再建や生計再建、災害対応、保健衛生の分野で支援を進めてきました。個人住宅支援ではこれまでに1万2400世帯の再建が完了しています。

住宅支援を受けたDaw Thein Htweさん（43歳）は「住んでいた家がサイクロンで崩壊。飯の住まいは狭く、7人の子どものうち何人かを親戚の家で寝泊りさせていました。今は支援を受けて再建した家で家族全員が一緒に安心して暮らせ

ます」と喜びを語ります。

生計再建事業では1万9300人とその家族が農業や牧畜、漁業の生業再開のための支援を受けました。

漁業用ボートを受け取った漁民のU K hin Maung Naingさん（37歳）は「洪水後はボートを借りて漁をしていましたが、賃料で収入の大半が消えてしまいました。今は貯金もでき、一番下の子どもを学校に行かせることができます。この状態が続けば上の2人の子も通わせられそうです」と笑顔を見せます。

全60校の日赤支援校が完成

日赤はIFRCを通じた支援に加え、2009年4月からミャンマー赤十字社との2国間事業として60校の学校再建を支援。2011年3月までにすべて完成しました。新校舎は村で唯一の鉄筋コンクリート製で、床が高い防災強化型です。普段は児童の安全な学び場であると同時にサイクロンなどの際には避難所



としても活用されます。

IFRCは今後もミャンマー赤十字社を中長期的に支援し、その発展をめざす体制をとっていきます。



新校舎で勉強する生徒

チェルノブイリ原発事故25年 教訓生かし 国際赤十字として対策を

旧ソ連のチェルノブイリ原子力発電所事故から25年。その節目の年に発生した福島第1原発の事故により、安全対策や周辺住民の健康問題に改めて国際的な関心が集まっています。国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)の近衛忠輝会長（日本赤十字社社長）は「事故の教訓を共有し、国際的な備えの充実を」と訴えます。

健康調査や治療を支援

実験中に原子炉が爆発した1986年4月のチェルノブイリ原発事故では、被曝により多数が死傷。現在も半径30キロ圏内への立ち入りが禁止されています。

IFRCは、周辺地域の住民を対象にした甲状腺がんや乳がん検診などの人道支援

活動を1990年からスタート。日赤はこの取り組みを支援してきました。

原爆被爆者の治療経験を生かした支援も行われています。広島赤十字・原爆病院は、医師会などと共同で「放射線被曝者医療国際協力推進協議会」(HICARE)を1991年に設立。ウクライナなどから研修生を受け入れ、被曝者医療を担う人材を育ててきました。

人道的見地からの注意を喚起

ウクライナの首都キエフで4月下旬に開催された「チェルノブイリ25周年国際会議～未来のための安全」には、各国政府や国連機関などが出席。原発の安全問題などについて議論しました。この中でIFRCは「被曝の危険がある地域住民のケアなどに人道的見地から関心を持ち、できる限りのことをやるべきだ」と問題



提起しました。

赤十字の使命のひとつである災害救援



IFRCによる住民の甲状腺がん検査が今も行われている

の一環として、原子力災害時に赤十字としてどのようなことができるかを検討するべきだとの意見は、日赤をはじめ各国赤十字社内でも強まっています。今年11月にスイスのジュネーブで開催されるIFRC総会や赤十字代表者会議などに向けて、さらに議論が深められる予定です。